

知らないうちに視力はどんどん低下して行く

近視の進行は、早期発見と早期対策の遅れが原因

「早期発見・早期対策」と聞いて何を思い浮かべるでしょうか。まず、かぜや虫歯を思い浮かべる人が多いでしょう。たとえば、くしゃみやせきが出れば、かぜをひいていることがわかり、熱っぽいと感じたら、体温計で熱を測ればすぐに熱があることがわかります。また、虫歯は眼にみえて悪くなっていくのがわかりますし、痛みを伴えば自覚せざるを得ないものです。

しかし、視力低下はそう簡単にわかるものではありません。なぜなら、はっきりとした症状がすぐに現れないからです。まして、子供は自分の視力に何の疑いも持っていません。というのも、0

・5〜0・6ぐらいの視力でしたら、日常生活にはほとんど支障がないからです。

ところが、いったん下がりはじめた子供の視力は、あつという間に低下し、学校での視力検査の結果を子供から手渡され、ひどく驚いたお母さん方も多いはずです。

たとえば、子供が遠くを見るときに眼を細めたり、「ぼやけて見えにくい」などと言い始めたときは、かなり視力低下が進んでいます。また、物によくぶつかったり、足元の小さな凹凸に気づかず頻りに転んだりしている場合も、視力の低下で物がぼやけて見えるため、とっさの判断ができないでいることが多いのです。

学校での眼の検査は、黒板の字が一番後ろの席でも見えるかどうか、学習に支障がないかどうかを調べるのが目的であり、近視・遠視などの眼の

異常を発見するためのものではありません。

ですから、学校の視力測定だけが頼りになるのではなく、日常生活での小さなしぐさや行動からも、お母さんのちょっとした注意や気づかいによって子供の眼の異常を発見し、早期のうちに解

決できるのです。

そして、少しでも遠くを見るときは眼つきや本を読む姿勢など「おかしいな」と感じたときは、専門医に診てもらい、早めにアドバイスを受けることをお勧めします。

子供の視力低下は早い



近視は、お母さんの注意や気づかいによって早期発見ができる



大人に比べて、子供の近視は進行が早い

1度視力が下がり始めると、あっという間に低下し、特に子どもの場合は低下が早いものです。お母さんの注意によって、お子さんの近視を、早いうちに発見してあげてください

